

御堂 義之の手記「大人はどうして戦争を」（吉川村史から）

たんすの前で和裁をしている母に近寄ろうとすると、遠のいていく。トラックで逃げる途中で他の人を振り落としてしまう。家の下に骸骨があって自分が殺してしまったのかと悩む ……。

爆心地から 1.5 キロの自宅で被爆した私は、そんな夢を繰り返して見てしまう。「助けを求める人をどうすることも出来ずに逃げたからでしょう」。畑から食べ物を盗んでは、「観なし」「不良」と罵声を浴びた。「もう死んでやる」と自暴自爆になった。

人を信じられなかった。よく熱を出し、切り傷の治りは遅かった。なぜ俺はこんなに苦労させられるんだ。大人はどうして戦争をしたんだ！ 自分ではどうしようもない思いにさいなまされた少年期を過ごした。苦労して大学の教官になってからも、悪夢にうなされ続けた。避難所で漂っていた膿のにおい、死臭、土壁のにおいが、今も体にこびりついているような気がする。

私は赤十字病院のすぐ裏の家で十五歳の兄と母の三人で暮らしていた。病院を火災から守るために建物疎開の命令を受け、昭和 20 年 8 月 6 日は引越しの最中だった。母は大八車に荷物を積んで家を出て、間もなく爆音が聞こえた。家の前に立っていた私は、強烈な光と、「熱い砂粒が顔に当たる砂嵐」の中で、逃げる方向がわからず、こまのようにぐるりと一回転し、家の下敷きになった。

しばらくしてもがいて出てみると、病院の中にいた兵士が壁にたたき付けられ血まみれになっているのが目に入った。隣にあった看護師の寮も全壊し、お菓子をもらったり折り鶴をもらったりしていた看護師の「助けて」という声が聞こえてきた。

私は奇跡的に無傷だった。爆撃機を見ようと屋根の上において全身にやけどをした兄と一緒に逃げる途中、川の魚が白い腹を出して浮いているのが見えた。「魚もやられとるよ」と言って兄を見ると、顔が二倍にふくれ、シャツが焼きついた皮膚ははがれてぶら下がっていた。

避難所では兄は下痢をし、隔離された。「水をくれ、水をくれ」と訴え、幻を見ているのか「すいかがそこにある、それをくれ」とうわごとのように言っていた。何も食べられず、声も小さくなり、一週間目に亡くなった。再会した母は、背中にやけどをしていた。膿をもち、ウジがわいた。素がないのでヒマシ油や、タマネギ、ヒガンバナの球根をすったものを塗った。九月に入ると発熱して脱毛し、紫がかった赤色の斑点が体じゅうに出た。約一ヵ月後、私の丁度十歳の誕生日に亡くなった。空地に廃材を集め、亡がらを焼いた。

死んだ兄以外に四人のきょうだいがいたが、すでに嫁ぐなどして、あまり頼ることは出来ず、「孤児」になった。大工や屋根屋の手伝いをして日銭を稼いだ。

学校を休んで仕事をしていることを友達に知られるのが恥ずかしかった。ひもじさに友達の手当を盗んだ。「犬がもっていった」。先生がそうかばってくれたことが忘れられない。

アルバイト先のおばあさんに「勉強をしたいなら東京に行って夜学に通いなさい」と紹介をもらったつてを頼りに十八歳で上京、神田の古本屋で丁稚奉公をしながら勉強をした。同世代の人より五年遅れで広島大学理学部に入学。親類の家に養子に入って勉学を続けた。原爆症で苦しむ被爆者を治したいという正義感が支えだった。

神戸大理学部で教官となり、授業や平和集会で被爆体験を語り続けたのは、戦争をした大人たちへの恨みをとにかく訴えたかったからだ。

兵庫県被団協副理事長、西宮市原爆被害者の会の会長を歴任。西宮市原爆被害者の会では、昭和 63 年から世界各地で灯籠流しを続けている。

米国で被爆証言をしたのは平成七年（注 後記参照）。アメリカ東部を回り、最終地点のロードアイランド州で八月一四日に退役軍人に語った。対日勝利を祝う「VJデー」だった。「原爆投下によってより多くの人が救われた」「真珠湾を考えろ」。そう返された。「そうじゃないんだ、あなたたちの子供を原爆にあわせたくないだろう?」。ただそれが伝えたいだけなのに…。現地の新聞の見出しにはなぜか「被爆者が謝罪」とあった。

「被爆者も過去の人間になろうとしている」と感じる。「次の世代には被爆者の話を聞いて核の恐ろしさを想像し、戦争を愚かだということを子供たちに伝えていって欲しい」

※ 朝日新聞（平成 20 年 8 月 2 日）

「聞きたかったこと 被爆から六十三年 特別編」より転載一部分追記

（注）平成七年、米国立スミソニアン博物館が被爆 50 周年を記念する原爆展の開催を準備していた。広島長崎からの被爆資料が展示される予定であった。しかし「原爆投下は正しかった」と主張する退役軍人らは、この原爆展開催への批判を繰り返し、米議会を巻き込む論争まで発展させ、原爆展開催中止に迫込んだ。私は米国に原爆投下の謝罪を求めたい。